





差別もない  
労働者の町だよ  
オレはこがなれい土着だが  
オレなりに満足している

今日の酒は  
ナカカ美味かろうよ  
ビールに  
チューハイ  
それに酒だよ  
あつまみは  
ビーナッツにせんべい  
ぜいたくは出来ないよ

部屋こいって  
ベット・ハウス  
ベットで  
オレだけの城だよ  
人気絶頂の  
ピンク・レディーが  
オレに向かっ  
にっこりと笑えんてくれる  
今日は本当に  
御苦労さん……と  
オレは  
ピンク・レディーに  
キッスしたよ

明日も朝が早い  
オレは早く寝るよ  
また明日会わせ  
いつまでもみんなの  
元気な姿を見たいよ……な

人情

人情といふ言葉がある  
山谷には  
その  
人情が少なくなった  
だが  
人情は  
いまだ残っている  
何時頃だったか  
何体の具合が悪いのか  
あまり無理しないで  
静養しろ。体が大事だ  
から……な  
わがかな縁きの中から  
ジューズ  
コーラ  
インスタント・ラーメンなど  
買ってもらった

それだけの事だが  
なにか心に残る  
その言葉自体が  
いそれと水ない物がある  
単なる事ではなく  
その気持だけでも  
人情と言っても  
過ぎではない  
困っている時は  
お互いさま……さ  
しくでも  
助けたら気持ち  
助けての言葉だけでも  
それだけでも  
心と心が通い合う  
それが  
人情だと思ふ

友

友だちが欲ければ  
黙っていることで  
君の心の中にあるものは  
そのままにしておくことで  
出かかっている言葉は

かみくだいで  
の井くんでしまひのぞ  
それから  
毒ばれろぞのをあげなさい  
その人は  
きつと微笑んでくれるでせう  
そして  
君と一線にいてくれるでせう

俳句 夢三日月

初詣友とひきたるみく心吉  
ひとし身の気安さに馴れ寝正月  
冬もや勤め傭りの淋しい音  
冬銀河未完のピルを斜めとす  
空ッ園土工おほおほふけやすく  
黒がまっ似合って冬がはじまりぬ  
蝦蟇口の産よりつまな銭夢の  
夢園に仁王立ちとなりて下ビの群  
罪の身に悪サの中に坐りけり  
虚無の眼に夢三日月の細々と

短歌 無頼

夢水かかき虚空に向いて思ひけり  
少年の如くに奇声発すの  
淋しさを知るが如く同性の

女いびきをすすむ性のたわな水か  
同性を愛しつつ生きていると噂する  
カッパ無頼の妖き媚体  
嫌悪のみ覚え来たらしつて男色に  
理解心深くこの頃抱る  
突然ケラケラと笑う友ありて  
夏の夜は無気味にふけゆく  
人信ごそのたびごとく裏切られ  
未采にわれは何に信ぜむ  
受けること云う言葉信ぜく同棲も  
踏みこむられかかな善悪

思いつきたるが如くに聖書読む  
信ぜんとすれば救われゆくか  
裏切られその日の友へ贈るため  
と首の如き言葉をけがす  
ただ一人迷いし君を知らずして  
悲しませたる更けき友かな  
同性を愛する友の今日もまた  
永遠まできぬ現状を見る  
諍いし後の寂く大抱く時  
喉まで出でし言葉をみ込め  
禁欲にやせて動作の美く傲慢を  
無頼土工は反抗に快感を知る  
埋れゆく若さを意識し突然に  
扉をゆする狂人の如くに

無題 安川

一、家をなれば  
親もない  
おのれたよりの  
人生続業  
明日はさびしい  
労働者渡世

二、不況不況の

風の中  
まともにつけて  
立ち向う  
明日もさびしい  
労働者渡世

三、ただれた胸の

奥深く  
かすかに残る  
夢を抱き  
明日にかける  
労働者渡世

無題

一、知りず知らず  
三日月が遊んで



あせるおきいで  
三年 去った  
何度もがいて  
はい上がるごと  
おまうばかりの  
ドヤムらう

二、あせを流して  
稼いだ金も  
バクチと酒場に  
消えていく  
ぞれでいいのかと  
おろかなおれに  
きかすばかりの  
ドヤムらう

労働者遺世 岡本全広 四〇才

一、酔い運命に流されて  
流し歩いた その先は  
酔って 飲んで 僕付いて  
西成どやの 床の上  
小六な 小室の 部屋の中  
ひとりさがしく 夜は更けて  
チンチン 電車が 走り出す

二、二に世帯が 一に心づか

朝の早よから タビ着いて  
仕事に有り付くうらさよ  
その日暮らこの 俺らには  
今日の女ぶれが 気にかかろ  
弱い男の吹きたまろ  
二二は大阪 釜ヶ崎

一、めぐる 春秋 七つを教え  
令唐都に ふう雨は  
千里はるばる 故郷は遠く  
男み水んの 涙雨  
暗い軒下 裏通り  
二二は大阪 釜ヶ崎

二、土方渡世は 雨ふりいらぬ  
いつと見つめる 空財布  
細せた姿が ちらちら見える  
照らしてちようだい 日月様  
暗い軒下 雨やどり  
二二は大阪 釜ヶ崎

無題

一、大空に 両手を 上げて  
目も眩しい 願いを願ける

今日からまた 人生の  
道は どんなに つらくても  
捨てやいけなげ 俺らの大  
小かく映る その影が  
俺の心を歌っている

二、ひとつこか無い 二の生命  
一度は捨てた こともあらず  
小六な酒場の 片隅で  
弱い男が 今日また  
飲んで二にすすき葉さん  
直け淋しい胎のつち  
足のもつれを なんとまろ

歌 中野全治  
お前は歌つた。  
お前は赤ままの花やとんぼの羽を歌つた  
風はさやまの女の髪をのめを歌うな  
すづてのよよなを  
すづてのうさぎを歌うな  
すづての物憂げなものを歌うな  
すづての風情を歌うな  
も、ほ、正、道、の、と、こ、ろ、を  
胎の足に在った心づか  
胎先きをすまき上げて来りガリのヨシギを歌う  
たまたまのことによって産むかえり歌を  
産屋の底から産むをくみ取った歌を  
産屋の歌を  
産むをくみ取った歌を  
産むをくみ取った歌を  
産むをくみ取った歌を  
産むをくみ取った歌を  
産むをくみ取った歌を  
産むをくみ取った歌を  
産むをくみ取った歌を  
産むをくみ取った歌を  
産むをくみ取った歌を  
産むをくみ取った歌を

オッサンの死

中野浩一

せんこう様の花園の中でオッサンが僕のため死んだ  
おれたはかろ可憐色に変わった  
俺にはこのオッサンの死が何だに思えてならない  
一人仕事につく事は一人仕事から女もれうとまうたどだ  
俺一ぱい飯を喰ひ奴がいろから喰えない奴が出る  
西成には無気力な老若。認屋自当のなまけ者  
アッコの首をくめているシンギ屋などときろゴミが  
あまりにも多過ぎる  
この道中がいつかきろ西成を本当に必要とてている  
弱い人間がいつまでも泣きを見  
二体満足なまけ者が喰ひ花園の中で  
ぬくぬくと生きたげける  
そのまう僕を分け者認屋の二十七才  
今さら希望をないけれこの西成からは出なければ  
俺が居たんご 一人 死ぬ

町の哲学者よ

昨日話をしていた友達が  
今日は二のよにまういた  
二度と女いつにやわわれない  
昨日あったオレの金  
今日は二にまありやしない  
金がほしくて生きるのか  
友がほしくて生きるのか  
地位かるか  
それとも自由が欲しいのか  
何であんたは生きるんぞ  
何のためにあんたは生れてきたんぞ  
みんな死ぬために生れてきた。  
そぞけど死人ださもうおれりや、  
オッサン！ オバハン！ 二ら、おにい！  
俺んでおまはんは生きるんぞ  
何ぞいって生きるんぞ  
本意はかておくれおれりや

人間証明

杉山一美

飲み散らかし  
喰いちらかの  
叶き散らかし  
いつ死んでおれらうが  
だれも文句なからうがい



